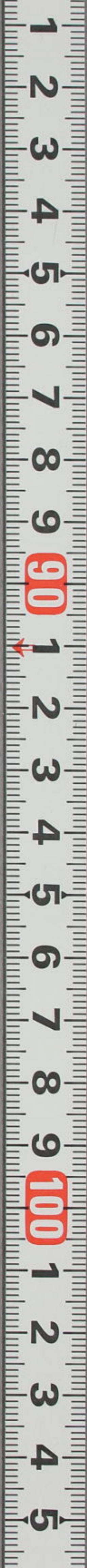


自覺錄

下

11-5  
109  
2冊



門仁  
號109  
卷27止

肥前

自覺談卷之下

齋

肥前田代

太白老人著

男村山一允仲校

南島

余初メ農タリシ時、稻ヲ蒔ルヲ老農ニ問フ、曰  
鎌ノ刃、指ヲ去ルヲ二分ニ過ルヲ勿レト、是ヲ習  
フヲ一日、常ニ手指ヲ誤ラニテヲ怯ル、稍ク習レ  
テ手ヲ下スニ、鎌ノ刃ト相會スル、纔ニ二分ニ過  
ス、竟ニ指ヲ忘レ、鎌ヲ忘テ、念頭一モ有テ十キニ

至ル、習慣ノ至ルトコロ、自然ノ妙ト云ヘシ、凡ソ  
道ヲ學フ、亦斯ノ如ナルヘシトソ覺フ、  
曾テ美人草ノ鉢植ヲ贈ル者アリ、一花ハ蒼漸ク  
口ヲ切ル、一花ハ發スル、既ニ七八分ト云、一  
片ノ葉猶萼上ニ懸リ、落ントシテ落ス、之カ為メ  
ニ發ト能ハサルモノ、如シ、余速ニ發カシメ  
トテ、陽氣ノ養ヲ待タス、竊ニ葉ヲ去リシガ、竟ニ  
發ト十ク、日ヲ歷テ凋萎シ、初メ漸ク蒼タルハ、ヤ

カテ滿開セリ、草木タモ然リ、況ヤ人ヲヤ、猥リニ  
富ヲ願ヒ、官ヲ求ル、是自ラ、扶クテ花ヲ開シムル  
ニ似タリ、一旦達シ得ル、有氏、又隨テ窮辱ノ至  
ルヲ見ル、唯天然ニ一任シテ、陽氣ノ養ヲ待ヘキ  
トトソ覺フ、

一僧倭歌ヲ詠テ云、身ヲ摘テ人ノ痛サヲ知ル人  
人、政コソ千代ノ祝言、

或人君常ニ此歌ヲ感誦シ、マシタケルトナリ、此

一首ノ歌ハ、海内ヲ一統シ玉フ基凡云ヘキヲ覺  
フ、

大職冠ハ、天智帝ヲ輔ケテ、入鹿ヲ誅シ玉ヒシ  
事ハ、時隔テ、記録詳カナラサレ凡、皇朝再造ノ  
大功タルトハ、其子孫ノ繁昌シテ、王與馬共天下  
スルノ勢アルヲ見テ、シルヘシトソ覺フ、

時平公、人唯菅公ノ故ヲ以テ奸惡ノ人ト稱シ、ソ  
ノ才學アルトヲ知サルハ、稗史野説ノ誤ル所ト

リ、此公素ヨリ門地高クシテ、夙ニ慧聰ノ稱アリ、  
年齢高カラサレハ、未タ學術老成セス、且内行脩  
ラサルヲ以テ、頗ル猜忌ノ心ヲ生シ、奸人ニ誤ラ  
レ玉ヒシト知ヘシ、又菅公其徳才ハシマシテ、此  
禍アル、亦天ト云ヘシ、夷ヲカニ之ヲ考レハ、時平  
公ハ、生前ニ榮ヲ得玉フナリ、菅公ノ徳光、今ニ及  
テ、マス々海ノ内外ニ耀キ、日々ニ新ニ、月々ニ隆  
十ル、何ソ余力賛辭ヲ待シ、仰ヘシ、敬スヘシ、抑祖

先止<sup>ル</sup>殉<sup>ラ</sup>ノ餘慶ト云ツヘシトソ覺フ、楠將軍ノ出ルヤ、後醍醐帝ノ奇夢ニヨレリ、藤房卿ノ人望、朝野ノ心ヲ定ムルニ足レリ、楠公何ソ皇基ノ興復シ難ヲ慮ラサランヤ、世々茅土ノ臣ニシアレハ、院宣一タヒ降テ、何ソ三顧ヲ待ニ、出テ王師ヲ率ヒ、忠勇節烈、金石不渝、終ニ天運ノ再ヒ廻ラサルヲ知テ、湊川ノ一死、以テ帝恩ニ報セラル、十ルヘシ、臨終ノ一言、悲慨言

フヘカラス、碑文ノ所謂精忠日ヲ貫クト、豈虚文ナランヤ、水足博泉ノ論ニ、碑面ニ忠臣ノ二字ヲ省キ、嗚呼楠子ノ墓トアラハ、千載ノ感慨猶限リ無カルヘシト云リ、廿モ有又ヘシトソ覺フ、或人赤穂ノ四十七士ノ忠節ヲ感シ、ソノ薄命ヲ歎シテ措カス、余カ曰、信ニ然リ、サレト、斯人ヲシテ平常ノ時ニ老シメハ、又平常ノ士ナルヘシトソ覺フ、

旭莊曰、四十七士ノ其名ヲ全スルハ、

公儀ヨリ切腹仰付ラレシ惠ニヨレリ、不然ハ、内ニ

ハ末路汚名ヲ取ル者モ少カラジ、

國史ヲ讀テハ、興廢存亡ノ理ヲ知ヘキナリ、モシ

此ヲ知スンハ、生涯讀モ何ノ益アラシヤ、唯亂ヲ

記シタル書ヲ太平記ト標題スルハ怪シ、作者ノ

微意アリトソ覺フ、

珮川曰、疑無陽、故曰陽月之意歟、

旭莊曰、太平ニモ亂ヲ不忘故ナリ、唐土ノ書ニ、

資治ノ字アルカ如シ、

弓矢執ル身ハ、名コソ惜ケレトハ、昔ノ武士ノ常

言ナリ、一言以テ其世ノ様ヲ知ヘシトソ覺フ、

少年輩朝鮮軍記ヲ讀テ、唯異國人ヲ弱シトハカ

リ思フハ誤リナリ、豊臣太閤英武ノ質ヲ以テ、朝

鮮朱明ヲ見侮リ玉ヒシガ、後ニ朱明ノ援兵ニ對

スル程ノ人數ヲ渡スヲ難クシテ、唯日本ニ近キ

海邊ノ城ヲ諸將ニ守ラセラレタルマテナリ、因  
テ日本ノ諸將、明ノ遊撃將軍沈惟敬ニ談シテ、種  
々奇計ヲ釀シ成シテ、漸ク歸陳スルヲ得タリ、  
初メ日本ノ諸將七頭ニテ、晋列城ヲ攻シ時、牧司  
金時敏士卒ヲ率ヒ、城ヲ出テ、七頭ノ備ヲ突崩シ、  
追討セシヲ

御陣中諸將ニ對シ、或夜ノ御物語ニ、金時敏若シ  
釜山浦ニ在テ、初ニ小西ヲ手痛ク當テハムツカ

シカルヘシ、此心ヲ蹈ヘテ、異國亂ル、ト聞カハ  
鍛練ノ武將ヲ撰ンテ九列ニ置キ、異國ヲ押ヘ廿  
セヨト仰アリシトナシ、今ノ野史ヲ讀ム人、能々  
心ヲ加ヘテ讀ヘキトソ覺ス、

朝鮮凱陣ノ時、諸將ミナ筑前管寄ニ在テ、一日モ  
早ク國ニ歸リ、尾張大根ノ香物ニテ、茶漬飯ヲ食  
ヒタシト云レシトナシ、今ノ人、其世ノ様ヲ思ヒ  
計ルヘシトソ覺ス、

日本東北地氣厚シテ西南薄キナルヘン、木曾義仲ノ如キ、山中ヨリ出テ、中原ニ馳騁セラルレ、西國ノ勇將、遂ニ旗ヲ揚ント志セルモノ無シ、近クハ鼯夫谷風雷電皆東國ニ出ツ、亦騷客關東ヨリ来テ長崎ニ遊フモノ、日々踵ヲ接スレ、西國ノ人、松嶋象瀉ノ風景ニ遊フハ、極テ稀ナルヲ覺

珮川曰、晋宋南遷、皆自北而逼、胡元滿清、亦是北

種、盖自北而南、則風氣地勢之自然、南人向北、克復中原、唯朱明之一祖、

淡窓曰、漢土割據スル、北必ス南ヲ併ス、吾邦ハ東強メ西弱シ、東ハ北ニヨル故ナリ、五大洲之大勢皆如此ト思ハル、雖然、コレ赤道以北ノ國ナリ、赤道以南ハ之ニ反セシ、

又曰、余昔年眼病アリテ、筑前須惠ノ醫家ニアリ、同舎ニ奧列ノ人アリ、是モ眼病ニテ治ヲ乞



フ為ニ來レリト云、余歎息曰、奥ニ名醫アリ、  
九列ノ人往テ治ヲ乞ンヤ、東西人心ノ不同、  
如是ト、因テ是ニ記ス、

旭並曰、必シモ不然ニ似タリ、神武帝日向ヨ  
リ天下ヲ一統セリ、南部津輕邊ハ、古ヘ蝦夷人  
コレニ居レリ、西方京口ノ人ト、戦ゴトニ西方  
勝テ、今ニテハ、奥列モ日本人ノ居トナレリ、地  
勢ニハ依ラス、天ノ運氣ニヨレリ、此事余別ニ

論アリ、爰ニ畧ス、

箕簞曰、豈唯日本ニ世界皆然乎、

凡ソ國之境ニ入ル時、先ツ試ニ酒ヲ喫ス、其味芳  
醇十ル寸ハ、民頗ル疲ル、ヲ知ル、又淡薄十ル寸  
ハ、民猶餘糧アルヲ覺フ、其俗未夕質十レハ十リ  
珮川曰、以酒味驗民俗盛衰、妙甚矣、辨溜澀  
山ニ樹木アルハ、譬ヘハ、人ニ氣血アルカ如シ、樹  
木繁榮スル寸ハ、山氣盛ニ、溪水流レテ竭ス、ソノ

地境早損ノ憂アルヲナシ、凡ソ國ニ山林ノ制アリ、其禁猶弛ムヲナカラシメヨト云、此言迂ナリト云、凡、實ニ民政ノ本トソ覺フ、或ハ山崩レ、洪水溢レテ、田地ヲ破テ有ハ山ノ氣血衰ルカ故也、人過淫ニシテ、元氣乏ク、却テ遺失アルカ如クナレハシ、

淡窓曰、アル先生ノ集義書ニ此事ヲ論スルヲ極テ切ナリ、迂ニ似テ迂ニ非ス、實ニ治國ノ本

ト覺フ、

一國ノ高ト、人高トヲ通計スルニ、一萬石ニ、人高五千ヲ以テ定トシテ比較スレハ、石高ヨリ人多ク國富リト云、少キヲ貧ト云ヘシ、是ヲ一村ニ約スルニ、人高減ル寸ハ、食常ニ餘アル理ナリヲ、却テ食足ラサルヲ見ル、又老幼戸ニ滿テ、徒食スル者多キ寸ハ、食常ニ乏キ理ナリヲ、却テ餘アルヲ見ル、是一村ノ盛衰ノ氣ノ係ル處トソ覺フ之

ヲ國ニ推スニ、財用ノ乏ヲ贖ントテ、許多ノ紙幣  
ヲ制シテ、之ヲ國內ニ行ヒ、現銀米ニ代ルト云凡  
國竟ニ富ヲ見ス、又隨テ困窮セリ、國運ノ係ル處、  
不思議ト云ヘシ、人々其末ヲ救フノ謀ヲノミ十  
シテ、其本ヲ計ルヲ聞ス、吾今賢キ人ニ問テ、運氣  
ヲ昌ニスルノ道ヲ聞マホシトソ思フ

吾カ田代府ニ於テ、美政ト稱スヘキモノ鮮カラ  
ス、鰥寡ノ老テ助ケナキ者ニ、一日ニ米三合、鹽錢

六錢ヲ下サル、是ヲ窮民救米ト云、貧民子ヲ産シ、  
養育ニ苦シム者ニ、米三俵ヲ下サル、是ヲ養育米  
ト云、又貧ニシテ、長ク病ル者ニ、一日ニ米一合五  
タ下シ、療養セシム、病愈ルヲ待テ止ラル、愈サレ  
ハ、窮民ノ部ニ入ル、是ヲ當時救米ト云、諸村ノ  
貧農、食豐十ラサル者、耕作ノカヲ盡シカタキヲ  
計リ、倉廩ヲ開テ米ヲ貸渡シ、初夏ヨリ中秋ニ至  
レリ、凡幾度、合テ幾千俵十リケルヲ、新穀收納ヲ

待テ元數ヲ黠シ、返納セシム、是ヲ義倉拜借米ト云、霖雨アレハ、千歳川ノ水逆流シテ、潦水民居ヲ浸ス、民三十屋梁ノ上ニ棲テ、炊クコトヲ得サルコト數日、凡此殃ニ係ル所十ヶ村、官府為ニ倉廩ヲ開テ炊カシメ、諸吏舟ニ棹シ、戸口ノ數ヲ逐テ、掬飯ヲ分ツコト數日ナリ、是ヲ洪水御救ト云、コノ水災ノ年、田禾腐朽シ、實ラサル寸ハ、水災無キ村々ニ命シ、年貢ヲ償セラルヲ、水損取替ト云、如是年ニ

ハ、食ニ艱ム農民少ナカラス、凡幾百人ニ、一日米一合五タヲ下サレ、春麥ノ熟スルヲ待テ救ヲ止ラル、是ヲ下村御救米ト云、官府ヨリ平日人參ニ分宛テ、諸吏ニ懷中セシメ、民急症ノ病ヲ告ル時ハ、直ニ之ヲ與ヘ服セシメ、而後ニ願書ヲ役局ニ出サシム、相應スル寸ハ再三シ、冬ニ至テ、一貼ニ錢百五十文ヲ上納セシム、是ヲ御救人參ト云、又貧民ニハ、上納錢十カラシム、是ヲ御仁惠人參ト

云、貧民牛馬ヲ死亡シ買フコトヲ得サル者ニ、錢拾二貫文ヲ下シ買ハシメ、四年二年賦セシム、是ヲ牛馬拜借ト云、火災類燒ノ者ニハ、竹木并ニ錢ヲ下サレ、家ヲ造ラシム、其數各定アリ、是等ハ其名目アルニ非レド、封内ノ人々面リ知テ、三十其惠澤ヲ仰キ蒙ル處ナリ、亦爰ニ一ノ善政ト云ハ、凡此領分ノ地ニ、田代瓜生野ヲ兩町ト稱ヘ、商買ヲ事トス、其他官道ニ屬スル小町モ、之ニ準シテ小

ク許スト云ド、餘ノ三十六村嚴ク之ヲ禁シ、小商一人モ有コトナシ、故ニ農家ハ全ク農ヲ務メ、村ニ餘地ナク、民ニ餘糧アリテ、農商各其業ヲ得ルナリ、是尤仁政ト云ヘシ、世降テ、人々各錐末ニ走ル風俗ヲ見ルニ、若シ國初ニ此制ナクハ、農民半ハ商トナリテ、即今ノ衰ヘ幾程ナランカ、古ヨリ未タ其恩惠ヲ稱スル人ヲ聞カス、余獨リ深ク是ヲ感シ思フコトアリテ、爰ニ細記ス、

珮川曰、羨哉風俗之淳、誰以鄙以下視之耶、

樂記ニ曰、風ヲ移シ、俗ヲ易ルニハ、樂ヨリ善ハ十  
シト、余竊ニ思フ、異域ノ古ニ之ヲ用ヒハ然ルヘ  
キカ、本邦ノ今世ニ、イカテ然ルヘケント、心ニ疑  
テ未タ領會スルヲ十シ、後ニ熊本ノ人少婦ヲ携  
テ淫奔シ、余カ里ニ流落シ來ル、頗ル字ヲ識ルヲ  
以テ余邂逅セリ、其言ニ曰、少年好テ書ヲ讀シガ、  
少ク病アリ、父之慈愛ニテ、許スニ淨琉璃ヲ以テ

ス、既ニ學フヲ一月、我イツノ間ニ於半長右衛門  
タルヲ知スト云リ、始テ禮經ノ意ヲ得テ、音聲  
ノ人心ヲ感動スルノ速ナルヲ覺フ、

心ヲ制センニハ、容ヲ端正ニスルヨリ善ハ十シ、  
恭敬人ニ下レハ、悖逆争鬪ノヲ總テ生セス、常ニ  
安然タリ、心ヲ以テ心ヲ制セントスルヨリ、却テ  
其心ニ擾サル、トソ覺フ、曾テ筆硯花木等ニ遊  
フ人ヲ見テ、頗ル其妙用ヲ慕フ、又釋氏ノ徒、朝夕

身ニ袈裟衣ヲ着シ、手ニ珠數ヲ離サ、レハ、姦惡ノ心、汚穢ノ念、一モ起ルヲ十シト聞リ、今ノ僧侶多クハ然ラス、

珮川曰、禪機、

神道ハ日本上古ノ風ナリ、今ノ人三十事ヲ神明ニ托ス、古ノ遺ト云ヘキヲ覺フ、神靈ノ鎮マセル山ニハ、金銀多ク有トモ云凡、神罰有ト言傳ヘテ、古來ヨリ闢キアクル人無シ、目

出度ヲトソ覺フ、

佛道ニ三世因果ノ妙理ヲ説ケリ、一日ノ内ニモ、復三世因果有力如キヲ覺フ、

珮川曰、一飢一飽、即是三界流轉、

僧道世界ノ中ニ在テ、耕サスシテ食ヒ、織スシテ衣ル、別ニ一世界有力如キヲ覺フ、神儒佛三教一致ト云ル人アリ、怪ムヘシ、教ヲ立ル各異ニシテ、身ヲ修ルモ亦同カラス、總テ道ノ

名アル、何レカ勸懲ニ外ナランヤトソ覺フ、  
三道鼎足ノ如ク、世ニ並ヒ行ハル、各々吾道ヲ崇  
クセントテ、他ヲ謗リ争ヒ論スルハ、自ラ卑クス  
ル所以ナリ、各己カ道トスル所ヨリ見ル寸ハ、外  
ノ二道モ、吾道ノ内ナルヘシトソ覺フ、

儒佛ノ道行ハレテ、吾神國ノ道ヲ妨ケ、古ノ風ヲ  
移セリト惡言スル人少カラズ、吾上古ノ神聖ハ、  
敢テ論セス、中葉ニ及テ、異域ニ道ヲ求メ、ソノ文

物ヲ假リ、是ヲ邦内ニ敷施シ、玉ヒ、神代ノ卷モ、漢  
字モテ始テ記載セラレタリ、又佛道諸宗門ハ、當  
今天下ノ人民ヲ點檢スルノ職掌ナレハ、容易ニ  
論スヘキニ非ス、信不信ハ、其人ニ有ヘシ、惡言ス  
ルハ、歷朝及ヒ時政ヲ謗ルナリ、最慎ムヘキトト  
ソ覺フ、  
今世寺社參詣ノ多キ、詩歌俳人ノ多キ、太平ノ真  
象ナルヘシトソ覺フ、



珮川曰、以遊民入泰平之象、與醉漢為饑歲之瑞、  
意較殊、

本邦葬祭ノ式、佛家ノ專ニスル所ト云氏、棺槨幡  
蓋神主等、凡ソ儒家ノ禮ニ似タリ、柩ノ飾ニ鏡ヲ  
カケ、鳥居ヲ立ルハ、神道ニ似タリ、又法橋法眼ノ  
官アル、鑿師茶人ノ風體、浮屠氏ニ似タリ、神前社  
壇ノ設、祭祀ノ器、加持ノ名、印相ノ法、又佛家ニ似  
タリ、社僧神ニ仕テ拍手禱祝スルハ、巫祝ニ似タ

リ、サレハ、三道混雜シテ、自ラ日本ノ風俗トナレ  
リトソ覺フ、

旭莊曰、三道混雜シテ日本ノ俗トナル下、確言  
ナリ、古來儒者、反テ言及サ、ル所ナリ、

余カ祖父没セシ時、葬式多ク熊澤了芥ノ備陽農  
葬記ニ據レリト、我父ノ語リキ、今領内ノ人誌石  
トテ、鉢ノ内ヲ磨リ、姓名等ヲ書キ、棺ノ上ニ收ル  
ハ其遺ナリ、其時見習タルカ、今ハ廣ク行ハレテ、

昔ヨリ有シトト思ヒタリ、

文章詩歌ノ風調氣運ニ因テ升降スルハ、本邦異  
域異十ルトナシ、元正帝ノ御宇ハ、盛唐ニ當レ  
リ、彼地ニ李白杜甫王維等アレハ、此地ニ人丸赤  
人家持ノ諸名公アリテ、其調ノ高華十ル、品格尤  
優十リ、彼ノ仲磨呂異域ニ在テ詠セラレタル天  
ノ原ノ歌ハ、全ク盛唐ノ詩調ニ協ヒ、名家ノ詩ニ  
モ劣ラサルヘシ、中唐ニ韋應物李益等アレハ、同

時ニ業平行平諸歌仙アリテ、其聲調雅純ト云ヘ  
シ、晚唐ニ許渾杜牧等アレハ、同時ニ忠岑貫之躬  
恒諸賢アリテ、其造意幽深ト云ヘシ、コレ異域本  
朝、同時ニシテ、文風ノ變化モ亦相似タリ、又彼ニ  
朱子ノ學興ル寸ハ、此ニ定家郷アリテ、古歌ノ體  
ヲ一變シ、後世ノ鼻祖トナレリ、畢竟氣運ト云ヘ  
シトソ覺フ、

本邦ノ書法亦異域ニ取レリ、サテ氣運ノ昇降ス

ルハ前ニ論スルニ同シ、唐ニ太宗以下虞世南、歐陽詢等アレハ、同時ニ嵯峨帝及ヒ空海アリ、宋ニ蘇子瞻、黃魯直等アレハ、同時ニ道風佐理行成ノ數卿アリ、元ニ趙子昂アリテ、時論ニ古ヲ集テ大成スト云ヘハ、同時ニ尊圓親王アリテ、本朝名譽ノ筆跡集テ、入木太祖ノ稱ヲ得玉ヘリ、是亦奇ト云ヘキヲ覺フ、

凡ソ詩ノ聲調ヲ論スレハ、唐ノ詩ハ公卿ノ催馬ノ樂歌フヲ聞カ如シ、宋ノ詩ハ、瞽者ノ平家歌フヲ聞カ如シトソ覺フ、

珮川曰、出愈新、

詩ハ神韻清響ヲ尚フト云リ、倭歌モ亦然ルヘシ、定家卿ノ歌ハ、エナラサルニ非ス、サレ氏業平貫之等ニ及ハサルハ、故アリトソ覺フ、書亦神韻ヲ要トスト云リ、余カ居大宰府ニ近ケレハ、幸ニ菅神大幅ノ真跡ヲ親ク拜覽スルヲ

得タリ、一幅ハ、離家三四月、落淚百千行ノ句十リ、  
一幅ハ、萬事皆如夢、時々仰彼蒼ノ句十リ、コレ皆  
左遷セラレマシタケル時ノ詩十ルヘシ、其書體  
中ニ敦厚雅純ノ氣ヲ含ミテ雄渾ノ風尤顯タリ、  
平生ノ御氣象然ラシムルカ、ハ夕詩句ノ意ニヨ  
リテ自ラ然ルカ、抑神ノ威靈ノ所存スル一辭ヲ贊ス  
ルモ恐レ有ヲ覺フ、

本邦ノ書風、古ヘ異域ト異ナルヲナシ、其中ニ少  
ク倭氣ヲ含ミタルカ如ナルハ、風土ノ然ラシム  
ルナルヘシ、代々因襲シテ、稍々增長シ、尊圓親王  
ニ至テ極ル、是ニ於テ、一箇ノ書體ヲ成シ、倭様ト  
稱シ、遂ニ兩域ノ書風隔絶セリ、此氣習近ク起ル  
ニ非ス、本邦書契アリテヨリ、萌シタル風土ノ自  
然ト云ヘシ、タトヒ風韻ハ隔絶ス、書法ノ異域  
ト異ナラサルハ、其本同ケレハナリ、アル儒者ノ  
論ニ、コノ親王毒ヲ四海ニ流サレタリト云ハ、過

激十ラントソ覺フ、  
馬ハ活物ナリ、死物トナシテ騎ルヘシ、筆ハ死物  
ナリ、活物トナシテ運フヘシトソ覺フ、

珮川曰、語亦活潑、

旭莊曰、古人ノ書ハ死物ナリ、活物ト為シテ觀  
之、自己ノ心氣ハ活物ナリ、死物トナシテ取セ  
ハ如何、

兩域共ニ書ニ雅俗アリト覺フ、即今長崎來舶人

ノ書風ハ、頗ル古法帖ニ異ナリ、本朝堂上ノ書ト  
地下ト、其風同カラス、コレ俗雅ノ分ナルヘシ、又  
侯國書吏ノ體ハ、所謂中書格ナルヘシ、

本邦ノ人ハ、唐様ノ書ヲ學フニ、多ク一家ヲ主ト  
シ、形ヨリ入ユヘ、書奴ノ名ヲ免ル、丁ナシ、淳化  
法帖ヲ始トシ、唐宋明何レノ代ニテモ、己カ好メ  
ル帖ヲ撰ミ、一家ニ拘ラス、初ヨリ終ニ至ルマテ、  
虚心ニシテ習フ、日ニ數十過スル寸ハ、己カ天

性ノ妙ト、古書ノ妙ト融化シテ、張旭十ラス、楮遂  
良ナラス、其間ニ一種ノ風韻ヲ生シ、其味ヒ彷彿  
ト、其代ヲ出サルナリ、又唐以上ハ、古キニ過クト  
イヘリ、此言サモ有ヘシトソ覺フ、

凡ソ少年ノ學フヘキト鮮キニ非ス、譬ヘハ、學問  
ハ本座ノ如シ、武術ハ門屏ノ如シ、書ハ玄關ノ如  
シ、詩歌ハ小座敷ノ如シ、閑暇自ラ樂ム處ナリ、琴  
碁茶湯、其外雜藝ハ、花園ウエコミノ如シ、賓主遊

戯ノ處ナリ、サレハ、門屏座敷ノミ有テ、小座敷花  
苑十キハ、役所ノ如シ、小座敷花苑ノミ有テ、門屏  
座敷十キハ、水茶屋ノ如シ、能ク門屏ヲ嚴ニシ、座  
敷ヲ修整シ、時々玄關前ヲモ掃除スヘシ、小座敷  
花苑ハ數奇ニ從ヒ、少ク有ヘキトソ覺フ、

珮川曰、亦能取譬、

或曰、少年事ヲ學フ、二十歳ヲ緊要ノ時トス、時ヲ  
過レハ、業ノ進ムト遅カルヘシ、専門ノ人ハ、論セ

ス、文武彼ヤ此ヲ學ハント志廿八、一年ニ一事ツ  
、ヲ專ニ修行スヘシ、或ハ半年カ、四季ニ分モ有  
ヘシ、一日ニ數事ヲ學ニテ、朝夕能勤ル凡、終身業  
ハ成難カルヘシト云リ、廿モ有ヘシトソ覺フ、コ  
レヲ雞卵ニ譬ヘハ、三日暖メテ一日之ヲ冷セハ、  
遂ニ成ラス、童子檜ヲ揉テ火ヲ取ル、指手ノ堪ハ  
ル處ヲ忍テ之ヲ揉メハ、暫時ニ烟出ツ、其堪ヘカ  
タキ際ニ至テ少ク憩フ時ハ、終日ス凡、火遂ニ出

ル丁十シ、余早ク此教ヲ聞サハルヲ恨ム、

珮川曰、世俗有諺、所謂禁酒三年、不若倍年數以  
夜飲之情、故往々不成事、

一名儒駕ヲ余カ廬ニ枉久、語次余ニ問テ曰、叟第  
子ヲ育スル凡幾何ソ、曰有丁十シ、唯能ク師ヲ育  
スル有ノニ、僻郷某々ノ詩歌ニ長セル、其初皆余  
カ教ヨリ出ツ、余適ニ詩歌アル寸ハ、渠ヲシテ削  
正セシメテ、幸ニ拙ヲ藏シ、且大誤十キヲ得夕

リ、又問、叟何人ニ學ヒタリヤ、曰、幼ニシテ讀書ヲ  
父ニ學ヒ、稍々長シテ、耘耕ノ暇、此ヲ目ニ謀リ、心  
ニ問ヒ、難字ヲ置キ、自得シ易キヲ自得スルノミ、  
人ニ對シテ講説セサレハ、自得タリヤ否ヲ知ス、  
又問、何レノ學脉ヲ主トスルヤ、曰、古註ヲ以テ讀  
寸ハ古ヲ主トシ、朱註ヲ以テ讀寸ハ朱ヲ主トス、  
妄ニ私説ヲ加ヘス、但シ事實ニ切ナル説ヲ愛ス  
ルノミ、又問、見識如何ニ、曰、識無キヲ以テ識トス

ルト云ヘハ、儒士大ニ余力狂ヲ笑フ、

珮川曰、似釋元政語、

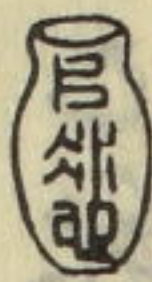
旭莊曰、以テ無識ヲ為識ト、乃孔聖ノ意ナルヘシ、述而  
不<sub>レ</sub>作、亦如是而已、

箕嘗曰、斯章深意難領得、



自覺談卷之下終

跋



讀書全然無事者。職由其不覺於  
 中。口耳。不如方寸久矣。學問之要。  
 願其自覺如何而已。田城邱山翁。為其  
 邑人所隱。通著此編。命曰自覺譚。  
 其源起於孝悌。涉時務。逮史傳。終說。凡

一百三十餘則。以覺字結語者十之九。概如護園南留別志之作。以尋常平之語叙之。而足以使人驚服。為其出於尋常之深。豈非如世也哉。孟軻氏曰。辭近而旨遠者。善言也。予於此編。亦云。

癸巳秋杪

多久草場韓撰并書



跋

太白翁寄示此著。求余有所評。隲翁蓋耳。順踰五。長於余三歲矣。余自入壽域。稍覺衰態。方且遊心於廣漠之野。以樂日月之遲遲而已。今披是書。居然妙合哉。此余所求而未能也。何其言之優游不迫乎。何其

每事留餘地之有醞藉乎古所謂鄉先生君子者其風度或庶矣乎夫年老而却多忿怒多欲憤世詆人苛刻於兒孫悒悒涉白首年者此自脞眉壽境字大不能保清樂也養晚節如翁天地不亦恢大乎誠能占樂地矣老而能樂始可以論者造德焉

聞之老者安之少者懷之以翁之言保老老者可以安矣以翁之言喻少少者可以懷矣其諸有道有德之書者非邪余亦將觀於大耄之嗟而鼓缶以從翁之後故作跋語係之卷尾爾

天保五年甲午正月

昭陽龜井昱

嘉永五壬子秋發行

京都富小路三條上九

枅 屋勘兵衛

江戸日本橋通貳丁目

山城屋佐兵衛

大坂心齋橋博労町角

河内屋茂兵衛

嘉永五年十月十日購于卯田旅亭街此書

